

日本文化私観

坂口安吾さかぐちあんご

三年前¹に取手²という町に住んでいた。利根川³に沿うた小さな町で、トンカツ屋とソバ屋の外に食堂がなく、僕は毎日トンカツを食い、半年目にはついに全くうんざりしたが、僕は大概一ヶ月に二回ずつ東京へでて、酔っ払って帰る習慣であった。

この町から上野まで五十六分しかかからぬのだが、利根川⁴、江戸川⁵、荒川⁶という三つの大きな川を越え、その一つの川岸に小菅刑務所⁶があった。汽車はこの大きな近代風の建築物を眺めて走るのである。非常に高いコンクリートの塀がそびえ、獄舎は堂々と翼を張って十字の形にひろがり十字の中心交差点⁶に大工場の煙突よりも高々とデコボコの見張りの塔が突っ立っている。

もちろん、この大建築物には一か所の美的装飾というものもなく、どこから見ても刑務所然としており、刑務所以外の何物でも有り得ない構えなのだが、不思議に心を惹か

5

10

1 三年前 この文章が発表されたのは一九四二年。
2 取手 茨城県南部の市。
一九七〇年九月まで、北相馬郡取手町。

3 利根川 群馬県北部から茨城県と千葉県の県境を流れて太平洋へ注ぐ川。

4 江戸川 東京都と千葉県の境を流れる川。

5 荒川 埼玉県と東京都を流れる川。

6 小菅刑務所 東京都葛飾区にあった刑務所。現在の東京拘置所。

れる眺めである。

それは刑務所の観念と結びつき、その威圧的なもので僕の心に迫るのとは様子が違う。むしろ、懐かしいような気持ちである。つまり、結局、どこかしら、その美しさで僕の心を惹いているのだ。利根川の風景も、手賀沼も、この刑務所ほど僕の心を惹くことがなかった。いったい、ほんとに美しいのかしら、と、僕は時々考えた。

これに似た他の経験が、もう一つ、ハッキリ心に残っている。

もう、十数年の昔になる。

銀座から築地へ歩き、渡し船に乗り、佃島へ渡ることが、よく、あった。この渡し船は終夜運転だから、帰れなくなる心配はない。佃島は一間ぐらいの暗くて細い道の両側に「佃茂」だの「佃一」だのという家が並び、佃煮屋かも知れないが、漁村の感じで、渡し船を降りると、突然遠い旅にきたような気持ちになる。とても川向こうが銀座だとは思われぬ。こんな旅の感じが好きであったが、ひとつには、聖路加病院の近所にドライアイスの工場があつて、そこに雑誌の同人が勤めていたため、この方面へ足の向く機会が多かったのである。

さて、ドライアイスの工場だが、これが奇妙に僕の心を惹くのであった。

工場帯では変哲もない建物であるかも知れぬ。起重機だのレールのようなものがある。

1 「その美しさ」は、どのような点に感じたのか。

7 手賀沼 千葉県北西部の利根川南岸にある沼。

8 銀座 東京都中央区の地名。デパートや有名店舗がならぶ繁華街。

9 築地 東京都中央区の地名で、銀座に接する。中央卸売市場がある。

10 佃島 東京都中央区の地名。隅田川河口に造られた人工島。佃煮の発祥地。

11 間 長さの単位。一間は六尺で、約一・八メートル。

12 聖路加病院 東京都中央区にある総合病院。現在の名称は、聖路加国際病院。

13 起重機 重いものを動力でつり上げて、上下・左右・前後に移動させる機械。クレーン。

り、右も左もコンクリートで頭上の遥か高い所にも、倉庫からつづいてくる高架レールのようなものが飛び出し、ここにも一切の美的考慮というものがなく、ただ必要に応じた設備だけで一つの建築が成り立っている。町家の中でこれを見ると、魁偉かいいであり、異観であったが、しかし、頭抜ずぬけて美しいことが分かるのだった。

聖路加病院の堂々たる大建築。それに較くらべれば余り小さく、貧困な構えであったが、それにもかかわらず、この工場の緊密な質量感に較べれば、聖路加病院は子供たちの細工のようなたあいもない物であった。この工場は僕の胸に食い入り、遥か郷愁につづいていく大らかな美しさがあった。

小菅刑務所とドライアイスの工場。この二つの関連について、僕はふと思うことがあったけれども、そのどちらにも、僕の郷愁をゆりうごかす逞たくましい美感があるという以外には、強いて考えてみたことがなかった。法隆寺14だの平等院15の美しさとは全然違う。しかも、法隆寺だの平等院は、古代とか歴史というものを念頭に入れ、一応、何か納得しなければならぬような美しさである。直接心に突き当たり、はらわたに食い込んでくるものではない。どこかしら物足りなさを補わなければ、納得することが出来ないのである。小菅刑務所とドライアイスの工場は、もつと直接突き当たり、補う何物もなく、僕の心をすぐ郷愁へ導いて行く力があった。なぜだろう、ということ、僕は考えずにい

15

10

5

② 「この工場の緊密な質量感」とはどのようなものか。

14 法隆寺 奈良県生駒郡斑鳩町にある聖徳宗の総本山。現存する世界最古の木造建築。世界遺産に登録されている。

15 平等院 京都府宇治市にある寺院。鳳凰堂が有名で、世界遺産に登録されている。

たのである。

ある春先、半島¹⁶の尖端^{せんだん}の港町へ旅行にかけた。その小さな入り江の中に、わが帝国の無敵駆逐艦¹⁷が休んでいた。それは小さな、何か謙虚な感じをさせる軍艦であつたけれども一見したばかりで、その美しさは僕の魂をゆりうごかした。僕は浜辺に休み、水にうかぶ黒い謙虚な鉄塊を飽かず眺めつづけ、そうして、小菅刑務所とドライアイスの工場と軍艦と、この三つのもを一にして、その美しさの正体を思いだしていたのであつた。

この三つのもが、なぜ、かくも美しいか。ここには、美しくするために加工した美しさが、一切ない。美⁴というものの立場から附^つけ加えた一本の柱も鋼鉄もなく、美しくないという理由によつて取り去つた一本の柱も鋼鉄もない。ただ必要なもののみが、必要な場所に置かれた。そうして、不要なる物はすべて除かれ、必要のみが要求する独自の形が出来上がっているのである。それは、それ自身に似る外には、他の何物にも似ていない形である。必要によつて柱は遠慮なく歪^{ゆが}められ、鋼鉄はデコボコに張りめぐらされ、レールは突然頭上から飛び出して来る。すべては、ただ、必要ということだ。そのほかのどのような旧来の觀念も、この必要のやむべからざる生成をばむ力とは成り得なかつた。そうして、ここに、何物にも似ない三つのもが出来上がったのである。

15

16 半島の先端の港町 神奈川県三浦半島にある横須賀市か。当時、海軍の軍港があつた。

17 駆逐艦 海軍艦船の一種。魚雷を搭載し、敵の主力艦や潜水艦を攻撃するために用いられた。

3 「その美しさの正体」とは何か。

〈魁偉〉 〈郷愁〉 〈謙虚〉
〈鋼鉄〉 〈遠慮〉
*たあいもない



坂口安吾の書齋（林忠彦撮影）

も二も百も、終始一貫ただ「必要」のみ。そうして、この「やむべからざる実質」がもとめた所の独自の形態が、美を生むのだ。実質からの要求を外れ、美的とか詩的という立場に立って一本の柱を立てても、それは、もう、たわいもない細工物になってしまう。これが、散文の精神であり、小説の真骨頂である。そうして、同時に、あらゆる芸術の大道なのだ。

問題は、汝の書こうとしたことが、真に必要なことであるか、ということだ。汝の生

15

僕の仕事である文学が、全く、それと同じことだ。美しく見せるための一行があってもならぬ。美は、特に美を意識して成された所からは生まれてこない。どうしても書かねばならぬこと、書く必要のあること、ただ、そのやむべからざる必要にのみ応じて、書きつくされなければならぬ。ただ「必要」であり、一

10

5

4 「文学が、全く、それと同じこと」とあるが、どのような点で「同じ」なのか。

命と引き換えにしても、それを表現せずにはやみがたいところの汝自らの宝石であるか、どうか、ということだ。そうして、それが、その要求に応じて、汝の独自の手により、不要なる物を取り去り、真に適切に表現されているかどうか、ということだ。

百米メートルを疾走するオウエンス¹⁸の美しさと二流選手の動きには、必要に応じた完全なる動きの美しさと、応じ切れないギゴチなさの相違がある。僕が中学生の頃、百米メートルの選手といえば、痩せて、軽くて、足が長くて、スマートの身体でなければならぬと極まっていた。ふとった重い男は専ら投擲^{とうてき}の方へ廻^{まわ}され、フィールドの片隅で砲丸を担いだりハンマーを振り廻^{まわ}していたのである。

見たところのスマートだけでは、真に美なる物とはなり得ない。すべては、実質の問題だ。美しさのための美しさは素直でなく、結局、本当の物ではないのである。要するに、空虚なのだ。そうして、空虚なもの、その真実のものによって人を打つことは決してなく、詮ずるところ、有っても無くても構わない代物である。法隆寺¹⁹も平等院も焼けてしまつて一向に困らぬ。必要ならば、法隆寺をとりこわして停車場をつくるがいい。我が民族の光輝ある文化や伝統は、そのことによつて決して亡^{ほろ}びはしないのである。¹⁵

武蔵野¹⁹の静かな落日はなくなつたが累々たるバラック²⁰の屋根に夕陽^{ゆうひ}が落ち、埃^{ほこり}のために晴れた日も曇り、月夜の景観に代わつてネオン・サインが光っている。ここに我々の実

18

オウエンス James Cleveland Owens 一九一三—八〇年。アメリカの陸上選手。ベルリン・オリンピック（一九三六年）一〇〇メートル走などで金メダルを獲得した。

19

「法隆寺も平等院も焼けてしまつて一向に困らぬ」のはなぜか。

19

武蔵野 東京都から埼玉県南部に広がる台地。かつては雑木林が広がる特有の風景で知られた。

20

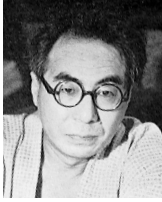
バラック ここは、粗末な簡易住宅のこと。「英語」 Barrack

〈光輝〉

*累々たる

実際の生活が魂を下ろしている限り、これが美しくなくて、何であろうか。見たまえ、空には飛行機がとび、海には鋼鉄が走り、高架線を電車が轟々と馳けて行く。我々の生活が健康である限り、西洋風の安直なバラックを模倣して得々としても、我々の文化は健康だ。我々の伝統も健康だ。必要ならば公園をひっくり返して菜園にせよ。それが真に必要なならば、必ずそこにも真の美が生れる。そこに真実の生活があるからだ。そうして、真に生活する限り、猿まねを差^はじめることはないのである。それが真実の生活である限り、猿まねにも、独創と同一の優越があるのである。

6 「猿まねにも、独創と同一の優越がある」と言えるのはなぜか。



坂口安吾 一九〇六（明治三九）—五五（昭和三〇）年。小説家。新潟県に生まれた。無頼派と呼ばれる作家の一人。敗戦直後の評論『墮落論』や、小説『白痴』は、当時の虚脱状態にあった人々に大きな衝撃を与えた。作品に『風博士』『桜の森の満開の下』などがある。この文章は一九四二年に発表されたもので、本文は「坂口安吾全集」第三巻によった。